

## 五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査)\*

加藤久雄\*\*、野村俊之\*\*\*、白濱聖子\*\*、藤本新之介\*\*

### Study of the tomb of hidden Christians in the Goto Islands

Hisao KATO\*\*, Toshiyuki NOMURA\*\*\*、Satoko SHIRAHAMA\*\* and Shinnosuke FUJIMOTO\*\*

#### キーワード

潜伏キリシタン、五島列島、墓制

#### はじめに

本稿は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所が主体となって、平成24年2月から同25年12月にかけて行った、五島市平蔵町字中木ノ口に所在する「旧木の口墓所」調査の概要である。

調査にあたっては、本墓所の管理者であり便宜をおはからいただいた木口榮氏をはじめとする地域の方々、1次調査を実施するにあたってご指導、ご協力を得た別府大学文学部田中裕介教授をはじめ学生諸氏、加えて遺物観察もお引き受けいただいた熊本市観光文化交流局文化振興課埋蔵文化財調査室(当時)の美濃口雅朗様に感謝申し上げます。

#### 1. 調査に至る経緯

2009年、木口榮氏によって墓所の存在を著者の一人である加藤は知らされ、竹林の中で石積みを数基確認した。数カ月後、木口氏が管理のため竹林を伐採したところ多くの石積みの墓が確認され、これらが墓所を形成するものであるとの認識に至った。

寛政9(1797)年の最初の公的移住者の108人の一部が、上陸地点である六方の海岸に近い平蔵を開墾地として五島藩から与えられる。平蔵にはすでに先住者集落があり、木の口はその平蔵の北側に位置する。木の口は開墾前は地名がなく、後で与えられた可能性がある。このように見ていくと、旧木の口墓所の被葬者は比較的初期の段階からの移住者とその子孫である可能性が高いと考えられる。

墓所を管理する木口榮氏は、カクレキリシタンの祭式で洗礼を受けている。洗礼時の抱き親(代父)はいとこであった。戦前生まれの兄姉はオラショとして「アベマリア」などを習ったという。

木口家はカクレキリシタンの信仰組織であるクルワの役員をしていたと伝わっている。その証拠として、聖人の祭日の祀りに使われるアワビなどの信仰具が残っている。

当該墓地は明治以前から使われ、木口氏の江戸時代生まれの高祖父、曾祖父が埋葬されており、曾祖母が大正期に石塔を建てた、なお現在残る竝石2基には建立者銘が刻まれておりこれを追認することができた。木口氏は、墓の管理を平成前期までおこなっていた。但し、その時期には木口氏の先祖の墓以外は竹林に覆われていた。2005年に、木口氏によって高祖父、曾祖父の骨を北側にある山向の墓地に改葬された。木口氏の祖父の代から山向の墓地を、カトリック信者とともに共用している。但し、区画は分かれている。

木口氏の幼少時には、旧木の口墓所は先祖の墓より上段に中心十字架があったことを記憶している。その十字架及びカトリック墓は、子孫によって福江に移送され改葬されたと聞いている。このことは、昭和30年代までは、カクレキリシタンとカトリックが共用する集落墓的な意味合いがある墓地であったことを示している。

旧木の口墓所は、周囲を木口氏一族所有の農地が占めており、家族墓から集落墓になっていく流れがあるかもしれない。幕末頃には5~6軒の一族が集落を営んでいたと聞く。一族の一部はカトリックに復帰し、一部はカクレキリシタンの信仰を選択したのではないかと聞く。木口氏の父の代までカクレキリシタンとともに神道を信仰していたと伝わる。

このような状況から、当該墓所は18世紀末以降に大村領から渡った潜伏キリシタンと、その人々の近代に至るまでの墓制の変遷をたどるために重要なものであるとの認識に至り、その実態を確認するために木口氏の同意と協力を得て考古学的な記録調査をおこなうこととなった。

\* Received January 30, 2014

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

\*\*\* 石造遺産調査会(長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所客員研究員)

## 2. 調査の体制と経過

以上の経緯を受けて、今後の調査方針を策定するため予備調査を実施することとなり、株式会社有明測量社文化財調査課長（当時）野村俊之の参加を得て平成24年2月平板による配置見取り図及び積石墓2基、表面に十字を浮彫にした板石1基の実測図作成を行った。これに際して、周辺に散布する陶磁器の一部に近世の所産と考えるものが見られたため、25年2月に熊本近世大名墓研究会（当時）の巡検で福江島を訪れた美濃口雅朗氏に所見を伺ったところ、18C後半～19C禁教期の肥前系染付が認められた。

これらの結果から、近代以降の改葬はあるものの、本墓所がかなり原型をとどめている可能性が高く、同時に継続時期を推定するに足る遺物情報の採取が可能であることが明らかになり、潜伏期のキリシタン墓造営の実態を知る上で貴重な事例であること、管理者が墓所の整備清掃を考えておられること、伐開の結果自然環境の影響を受けやすくまた、心ないものによる被害の発生もありうるため、関係者と協議を重ねた結果、平成25年9月1日より5日、実測調査及び管理者の墓地清掃に伴う遺物の記録・取り上げを行った。

また、調査期間中は天候が不順であったため、追加個別実測及び遺構観察表作成を、同9月21日、12月21日に実施した。

## 3. 位置と環境

本墓所は木の口集落の南側標高およそ20m前後の西側に向かって開ける丘陵鞍部の緩斜面に位置し、更に南側は谷に向かって落ち込む。集落とは小河川によって隔てられており、農耕用の里道によって結ばれる。かつては周辺も含めて畑地が広がっていたということであるが、現在は本墓所に隣接する下段及び上段と里道を挟んだ北側のみが耕作されており、その他は耕作放棄地として雑木林または竹林となっている。



墓所上段より集落方向を望む（南東から）

西側の平地には奥浦を經由して戸岐に向かう県道が眼下に伸び、人目につかない山間部に位置しているとはいい難い。また目視できる道を挟んだ西側丘陵斜面には現浦頭教会墓地が営まれており、浦頭教会も直線距離にして約300m北側に位置する。

周辺の基盤層は五島層群を形成する泥岩と砂岩の互層である奥浦層とそれに貫入した五島花崗岩類と呼称される花崗閃緑斑岩とによって成立しており、両者の境界は接触性の変成岩が存在する。墓所の基盤層は主に基盤層の風化及び再堆積による礫を多く含んだ酸性土壌である（※1）。

周辺地域で埋蔵文化財の調査がなされた例は数少ないが、北の戸岐地区では「印文陶」とともに宋代の陶磁器が出土しており、戸岐、奥浦の深い入江が大陸交易に何らかの形で関わっていたことを示すものと考えられる（※2）。

また北に隣接する奥浦地区は1566年ルイス・デ・アルメイダ、ロレンソ来島に際して120人が洗礼を受けたとされ、後に福江・六方とともに教会が建てられた（※3・4）、その遺跡は同地「寺屋敷跡」に比定されている（※5）。

そののち五島氏初代純玄のキリシタン追放後、一旦は再び規制が緩んだものの禁教令を受けて晩年棄教した2代玄雅を経て、1614年の領内キリシタン追放、1628年の制札設置によるキリシタン入島禁止など取り締まりを強化した3代盛利、さらに1664年の宗門改め徹底により五島のキリシタンは信仰組織を含めほぼ衰退したとされる。

しかし18C第4四半期になると、大村藩外海地区からの移民が流入し、特に寛政8（1796）年藩主五島盛運は疫病や飢饉によって減少した人口を補い領内の開墾と殖産を目的として大村藩主純伊に移民を依頼、大村藩としても人口抑制と潜伏キリシタンの取扱に苦慮していたため双方の利害が一致し、移住者として100名余が六方に上陸、この移民は大浜の黒蔵・岐宿の楠原の他、六方に近接する平蔵などに住み着いたとされる（図1）。この後も公的移住は継続し、一方で先に移住した人々の伝手を頼って、私的に移住したものも数多くいるという。このような移住民は福江島にとどまらず、宇久島を除く五島列島各所に展開していった。またこれらの移住民の大半は潜伏キリシタンであったという（※6・7）。

もともと、耕作に適する土地は「地下（じげ）」と呼ばれる先住者がしめており、もっぱら未開墾の丘陵地や入江に面した僅かな平地を開墾し、ま



た藩としてもそれまで制限していたサツマイモ栽培を認め、麦を年貢として収納することとした、元々外海地区の住民はサツマイモ栽培を早くから手がけており、一種の技術移転として機能したであろうことは、後の五島列島の農作や産業に大きな影響を与えたことからいいうるであろう（※7）。

木の口は平蔵のすぐ北側に位置し、比較的初期の段階から居住者が定着していた可能性を考えたい。

なお、奥浦に所在する栄林寺には、近代になってカトリックに復活した世帯や、仏教などに転宗した人々から納められた「マリア観音」と伝えられる白磁製の観音像などが祀られている。移住者といえども寺請制度から逃れ得ない潜伏キリシタンとの関係を考慮する必要もあろう。

#### 4. 調査の概要

##### (1) 予備調査

平成24年2月10日・11日に管理者木口榮氏立会協力の下、加藤久雄・野村俊之によって実施した。調査期間中、松本作雄氏（五島市文化財保護審議委員会委員長）の来訪を受け調査指導を頂いた。

この予備調査では、管理者木口氏により伐開された現地を加藤・野村で踏査を行い、石組みの分布域から墓域の範囲確認を行った。その結果、墓域は緩斜面を概ね3段に整地し、各段の法面を土羽（どは）としている点が福江島内にみられる耕作地と異なることに注目した。また、里道を挟んで西側下段に1面、同じく北側に1面現在の耕作地があり、里道が続く墓域上段にも平坦面が広がっているが現在は耕作されておらず、石組みの痕跡も確認できなかった。この時確認できた石組みは50基に上り、この他改葬に伴う落ち込みや、礫の集積が15カ所ほど見られた。また、2段目の南東隅には、明治・大正年間の年記銘を持つ墓石竿石、基壇等2基分が放置されていた。これらの状況は、木口氏の証言「カトリックに改宗した人は浦頭教会墓地に移した」、「大叔父の墓も福江に移した」と矛盾がなく、大略の裏付けとして有効であることを証明している。

また石組み墓は、基本的に方形をなしておりはつきりと長方形を示すものがほとんど見られないこと、いくつかの類型があり、それらの中には大部分は倒れているが中心に長球形の円礫又は、縦長の角礫が見られることを確認した。前述の2基を除き石製の墓標が現存しないこと、最上段に

長軸1／3の表面に十字の浮彫を持つ砂岩製の長方形加工板石があることが注目された。

この他、一部に陶磁器片が散布しており、その大部分は明らかに近現代のものであるが、幾つかについては、近世の肥前系染付である可能性があり、墓所造営の時期推定に資するものであると考えられた。

以上のような観察と、調査期間等を踏まえて、平板測量による1／100縮尺による配置見取り図の作成、石組みのサンプル実測、十字の浮彫を持つ石材の実測をいずれも1／10の縮尺で行うこととした。但し機材と期間の制約および、近隣に基準点・水準点が存在しないことから、仮の図根点を設定して平板測量を行うこと、同様に個別のサンプル実測も断面図にあっては仮の水準で行うこととし、遺物については、散布の位置関係が個別の石組みとの関連を分析するため、今回は取り上げ等をおこなわないこととした。

この調査の結果、石組みは等高線にそって配置され、個々の方位もそれに準ずること、造成2段目が墓域の中心となり、石組み配列に一定の規則性があることが明らかとなった。同時にいままで伝承等は残っているものの、潜伏期のキリシタン墓の考古学的解明に資する価値を有する貴重な事例であることを確認した。

また課題として、墓所清掃着手前に保存手段を講じる必要が有ること、散布遺物と石組みの関係を明確にし、同時に流失や心ないものの不用意な持ち去りを防ぐため記録を取る必要が有ること、十字の浮彫を持つ加工板石の性格分析が必要であること、そのためにはより詳細な調査が必要であるとともに、各分野の研究者の助言を求める必要が有ること。現状保存のため不用意な進入、改変を防ぐためと、確実な評価を行うため本調査を実施し、一定の分析が終わるまで公表を控えることを管理者・調査者間で共通の認識とした。



予備調査状況



予備調査時の現地（北から）

## （2）本調査に至るまで

予備調査の所見を踏まえ、加藤、野村はそれぞれ他事例の研究、現地での聞き取りや踏査を機会がある事に行ってきた。24年末から翌年春にかけて実施した半泊の文化的景観調査時には、現地の再確認や意見交換を密に行うことができた。

またその過程で、平成24年12月に実施した熊本近世大名墓研究会（現：九州近世大名墓研究会）による大円寺五島家墓所調査に際して陶磁器の研究者である美濃口雅朗氏を現地に案内し、陶磁器の製作地や時期についての所見を頂いた。

さらに25年5月には、美濃口氏に加え、豊後地方のキリシタン墓地研究をされている別府大学文学部田中裕介教授も来島され、上記大円寺墓所・福江城とともに現地に御案内し、助言を頂いた。



両氏による巡検（大円寺墓所）

以上のような経過を経て、同年夏休みを利用して第1次調査を実施することとなり、本学現代社会学部学生白濱聖子・藤本新之介に加え、田中教授のご協力の下、別府大学文学部学生の松園菜穂も合流し、9月1日より調査に着手した。

## （3）第1次調査

上記の通り、9月1日より同5日まで実施した。調査体制は以下の通り。

調査主体：本学地域総合研究所

調査総括：加藤久雄（本学経済政策学科准教授）

調査担当者：野村俊之（石造遺産調査会）

調査指導：田中裕介（別府大学文学部教授）

美濃口雅朗（熊本市役所文化財調査室）

松本作雄（五島市文化財保護審議委員会委員長）

調査協力：木口榮（墓所管理者）

参加者：白濱聖子・藤本新之介（本学現代社会学部学生） 松園菜穂（別府大学文学部学生）

※敬称略・所属は当時

特に、墓所管理者である木口榮氏には、休憩所・トイレの提供のほか、多大なるご配慮とご助力を得た、記して感謝する。

調査期間中は二度に渡る台風接近と重なり、調査日程に大きな影響が出た。このため、当初予定していた個別実測を実施できず後日、野村が白濱聖子、松園菜穂の協力を得て実施した。また雨天を利用し、地域資源の巡検、キリシタン関係遺物について田中・美濃口両氏からレクチャーを受ける機会を持った。



地域資源巡検



遺物観察指導

## 5. 1. 調査の目的と実施内容

本調査は、1) 墓所配置の詳細な把握 2) 石組みの特性の把握 3) 遺物分布状況の記録と取り上げ 4) 墓所の基本的な位置づけ 5) 今後の調査方針と保存手段の検討を主眼とした。

大部分の石組み墓は近年の参拝・祭祀の痕跡も

認められず、伐開以前は竹林に埋もれて忘れられた存在であったとしても、改葬痕跡のあるものを除けば今もその下には埋葬者が眠っているものと考えられる。文化財保護法はもとより「墓地、埋葬等に関する法律」に鑑み、また死者に対する敬意として、管理者の墓地清掃に伴う表採遺物の三次元座標にもとづく取り上げと、実測に係る最小限のポイント設定を除き、現状を変更しないことを旨とした。

調査は、縮尺1/50の平板実測とレベリング、遺物の位置記録（平板実測図内に位置とレベル・遺物番号を記録）採集状況の写真記録を実施した。期間・予算等の制約上、予備調査と同様基準点測量・水準測量は実施できなかった、このためすべての方位は磁北標示し、水準はベンチマークをプラスチック角杭で設置して、ベンチマーク+252.3cmを眼高ゼロとし、ダウン値で表示している。

調査に先立って、悪天候の中、田中氏・美濃口氏とともに現地を確認を行い、協議の上実施の具体的な手法と方針を定めた。



平板測量風景

## 5. 2. 配置図測量の成果

木口氏の環境整備がより進んだため、状況の確認がより容易になったとともに、準備期間での打ち合わせ、事例研究が進んだため、今回石組み墓として確認できた数は66基にのぼる。これらについてはNo.1から66までの通し番号を与え、配置図及び観察表で統一表記した。一方改葬に伴う落ち込みは表土の流入が発生したためやや確認しづらくなっている。このため、配置図の内47、48に対応し改葬が確実な2基については、予備調査時の見取り図から書き起こし追加した。ここでは同様に小文字アルファベットaからlおよび追加調査で確認したxを与えている。礫集積であることが確実なa、b以外は改葬墓の痕跡である可能性が

高い、したがって、本墓所の基数は最大で77となるが他にも改葬墓がある可能性がある。

南側の未伐開部分については、他の石組み墓の存在を否定しきれないが、すぐに自然の傾斜面になっていることと、木口氏の「かつてはこの部分を通路として使っていた」という証言からここでは含まないこととする。

占地は、北側及び西側里道下の耕作地、南側の雑木林から急激に高低差が付きあるいは傾斜が大きくなることから、尾根鞍部の緩斜面を墓所造営の対象としたものと考えて差し支えなからう。また、集落の後背地であること、集落が西側斜面に展開しており、その結果西に向かって開けた場所が選択されることは、寺院墓地ではない近世の墓所造営としてむしろ普遍的な例であるといえよう。

本墓所は、3段の平面造成部分に大別され、造成面は等高線の流れと周囲の状況から、旧地形にそって造成されたものとする。なお、南端の年記銘により、明治・大正期の埋葬であることが明らかな改葬墓47、48のみ1～2段の中位に造成面があるが、ここでは埋葬時期が新しいこと、基壇・竿石を持つより近代的な形態を持つことから新たに造成されたものであろう。また、南西隅にも僅かながら平坦面があるが、石組み又は墓石等の痕跡は確認できなかった、墓域外と考えられる。同様に東側斜面上位にも平坦面はあるが少なくとも隣接する部分には墓を造営した痕跡は認められない、墓所造営開始後の開墾地であろう。よって中心となる墓域は3段の造成面に限られ、ここではそれぞれ「上段・中斷・下段」と表現する。上段と下段の比高差はおよそ2mを測る。



中段配列状況（北から）



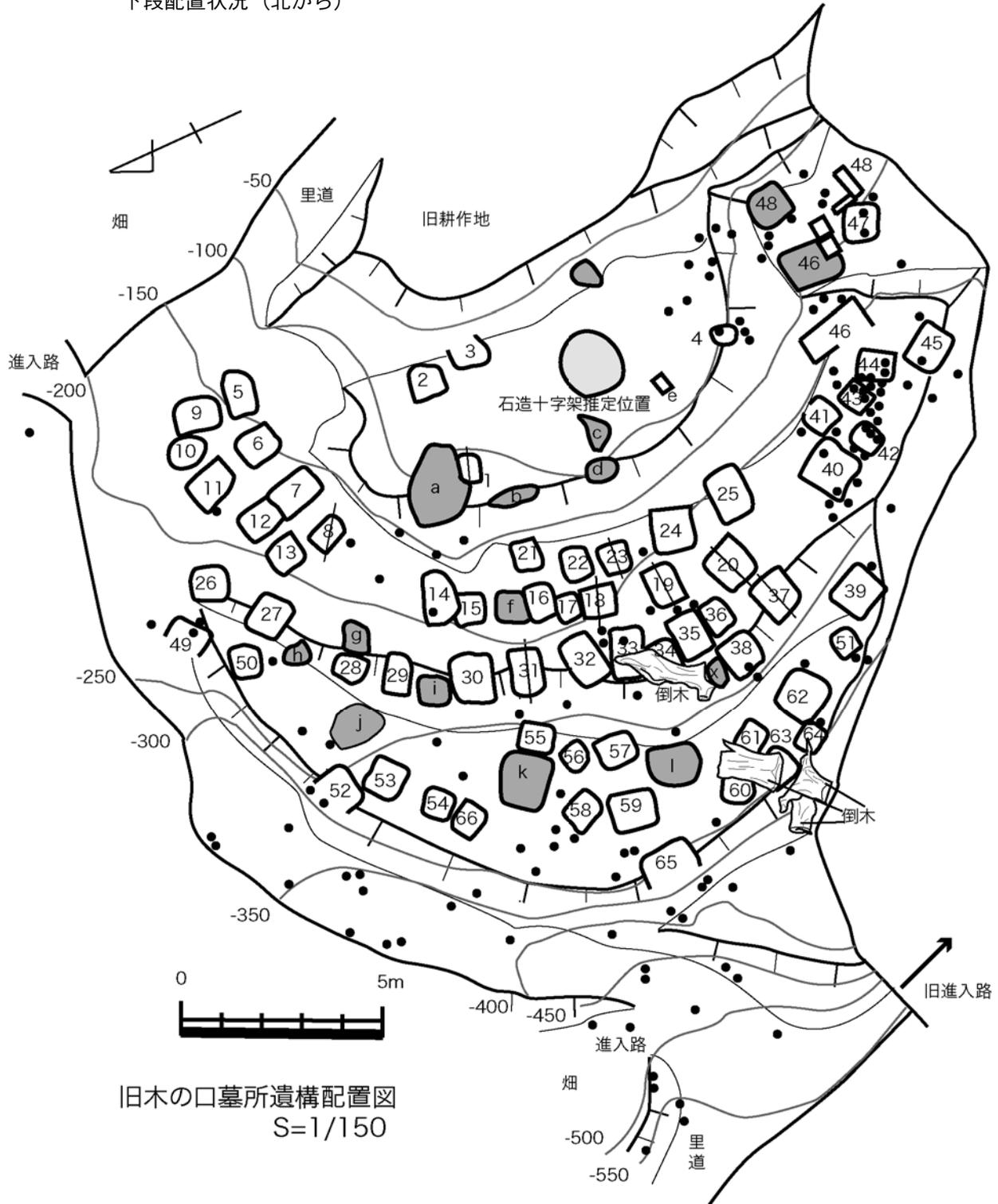
下段配置状況（北から）

上段は加工板石墓1、石組み墓3、改葬痕2、小型の板石墓の可能性のあるeを含めても8基を確認したのみである。

中段は最も石組み墓が集中する部分であり石組み墓43基、改葬痕3を数える。

下段は石組み墓14基改葬痕4を数える。

土砂の流入による埋没を勘案しても、中・下段は改葬痕の比率が石組み墓に対してもっとも低く、改葬が、被葬者が判明している場合に限り実



施されるとするならば上段に先行して造営され始めたものと考えうる。後述のように十字の浮彫加工板石墓が近代の所産であろうことを考えあわせると、その妥当性は高くなる。また中段では等高線に沿った2ないし3列埋葬の傾向が見える。

配置原理は、他の近世墓と比較しながら別稿にて考察をおこなった。

### 5. 3. 個別実測及び観察の成果



十字浮彫のある加工板石（南から）



年記銘を持つ竿石（西から）

型の礫を並べ石組みの区画を明示するものである。埋没により配列内部の観察ができないものもあったが、この輪郭内に、1. 同様の礫を充填するもの 2. 形状の異なる礫を充填するもの 3. 扁平な小型円礫を充填するものに大別でき、更に中心に長円礫または細長い角礫を配置するものがある。この中央に配置される礫は本来立った状態であったと考えられ、典型的な配石墓の形状を示すものである（図版5）。



No.19 石組み墓（南から）



No.23 石組み墓（真上から）

部分的な埋没や流出、倒木により観察が行えない部分も多々あったが現状での観察結果は表1～2に示す通りである。

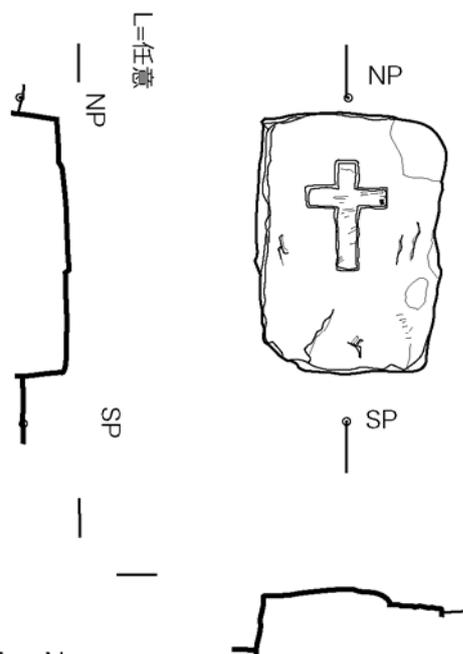
まず、十字浮彫を持つ加工板石であるが（図版1）浮彫以外に年記銘や被葬者銘を持たず時期推定の決め手を欠いていた。久賀島浜脇カトリック墓地や大村藩領浦上木場・三ツ山墓地等に同様な形態を持つ事例が見られ、復活後のカトリックのものであろうと判断した。大正の年記銘を持つ墓石と合わせて、近代に入ってから少なくとも大正までの埋葬が継続していたことは裏付けられた。これらの近代墓がいずれも埋葬施設の中心となる中段ではなく墓所の縁辺部にあることから、後続する時期に造立されたであろうことは墓所の起源を考える上での手がかりとなろう。

次に石組みの構造であるが、これはいくつかの類型に分類できる。第1に輪郭にそって比較的大

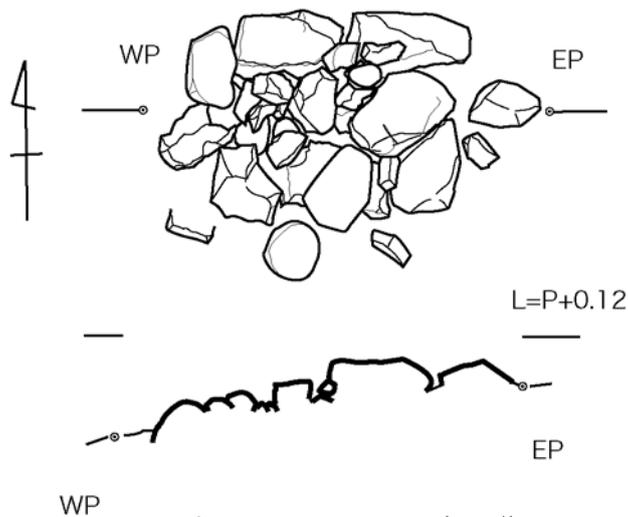
第2に、礫を2段以上積み上げるものがある（図版3）。本来この形状をなすものが崩落により、現状で前述した区画を明示し内部に礫を充填するパターン、特に1. や2. の形状を示すものがあるだろう。

また、追加実測時に気づいたことであるが、輪郭の外側に接して礫を1個配するものがあるようである、いずれも標高の高い側に見られる。大正期の2基を除き墓標となるものは見られないが、あるいはこれが頭位または足位に設置された墓標の代わりとなるものかもしれない。

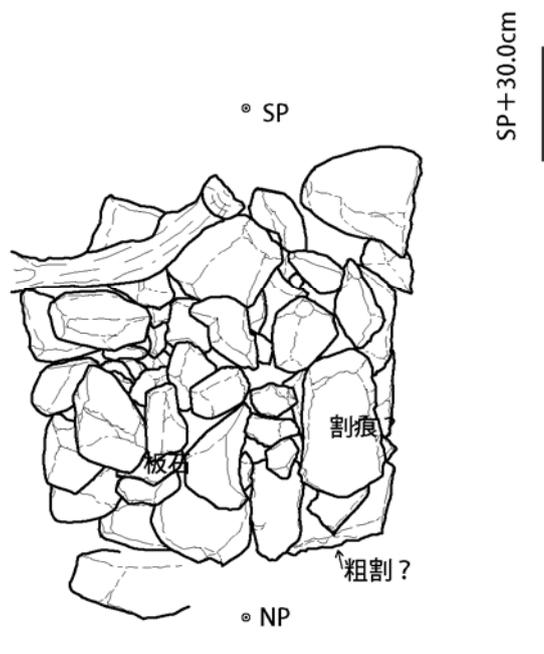
平面形は方形から略方形を基本としており、縦横比が1：1.35を超えるものは中段北端を除き殆ど見られない。移住元である大村藩領において潜伏キリシタンが「長墓改」（※8）を回避するため地上構造物を方形にすると考えられる例があ



図版1 No. 十字浮彫加工板石



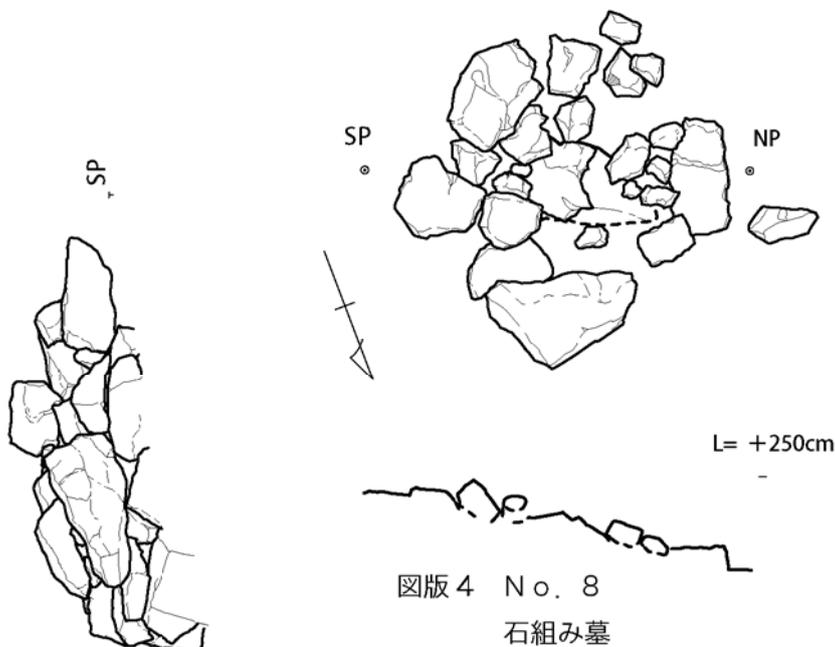
図版2 No. 23 石組み墓



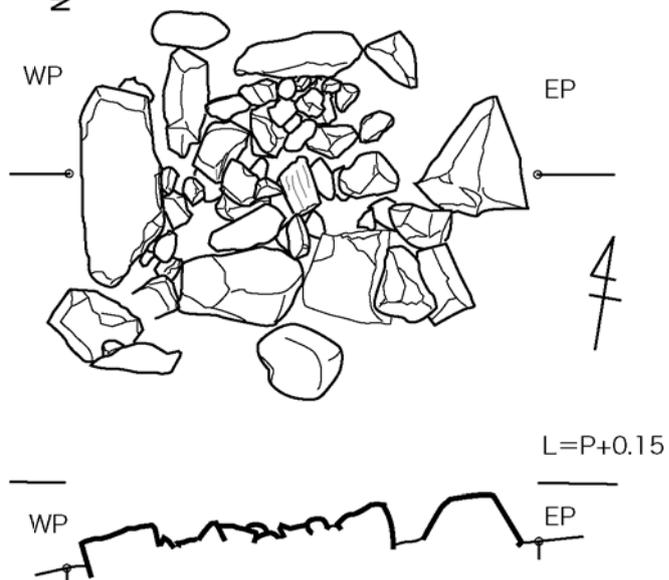
図版3 No. 37 石組み墓

0 0.5m

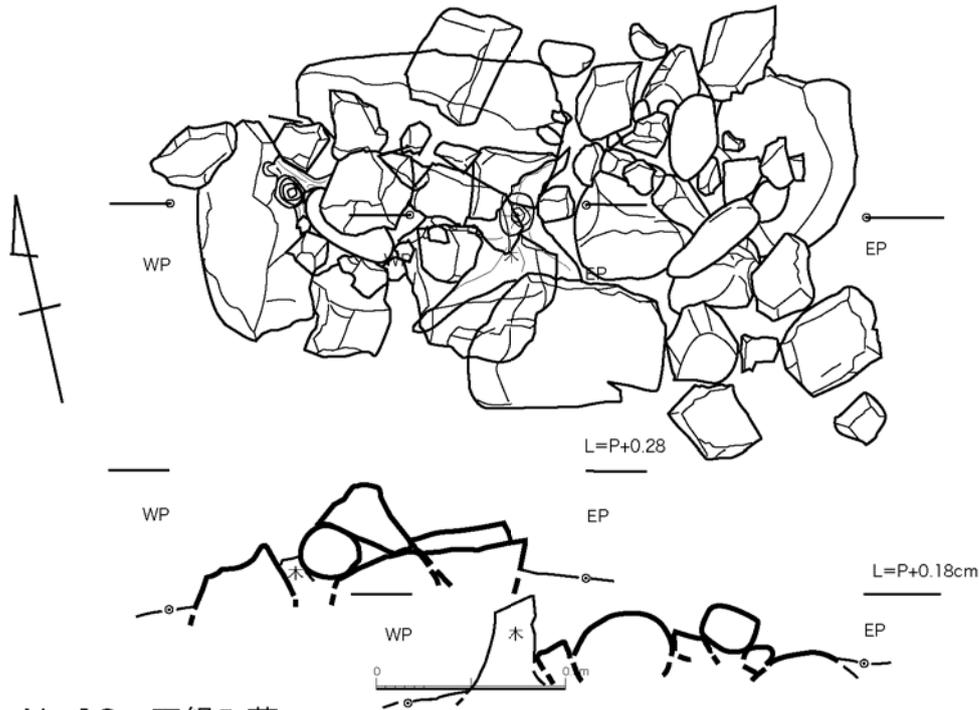
石組み墓実測図 縮尺 S=1:20



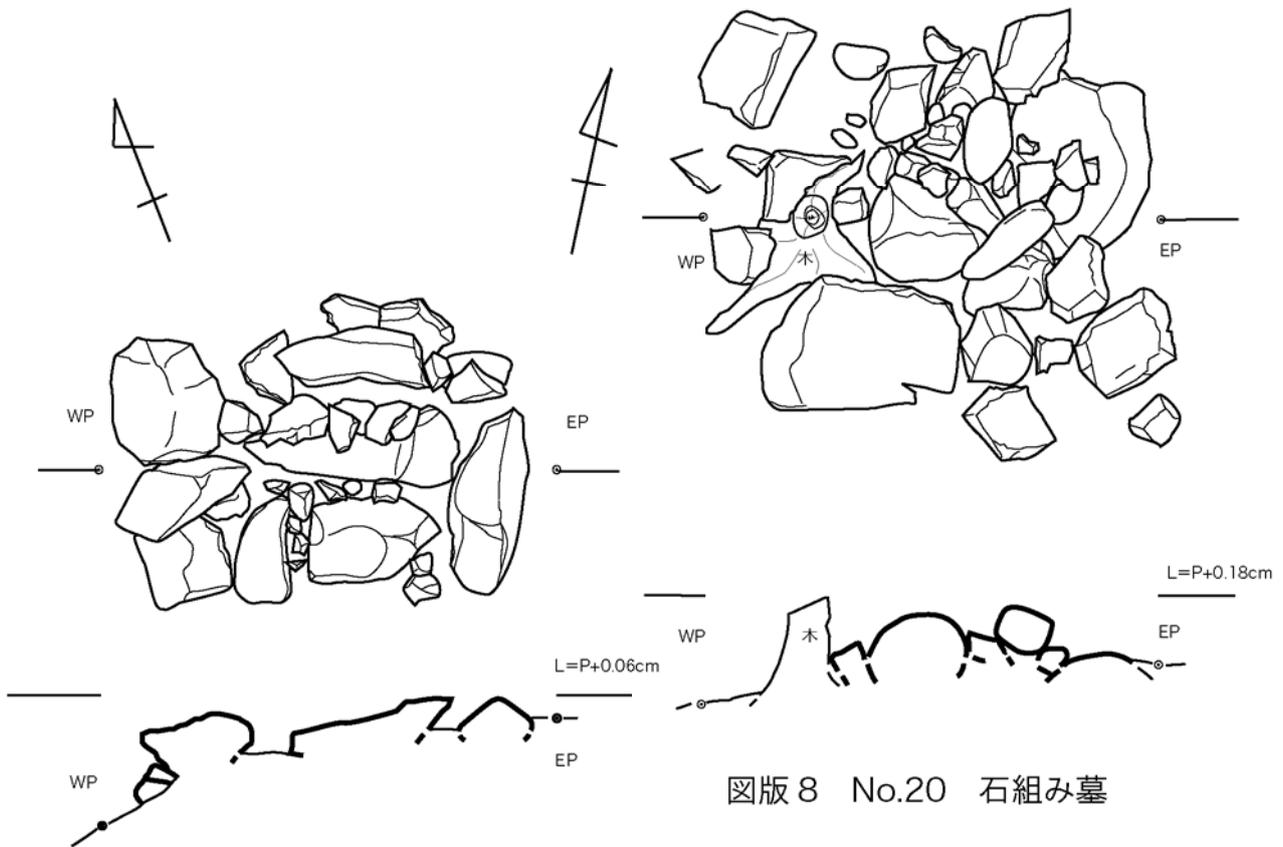
図版4 No. 8 石組み墓



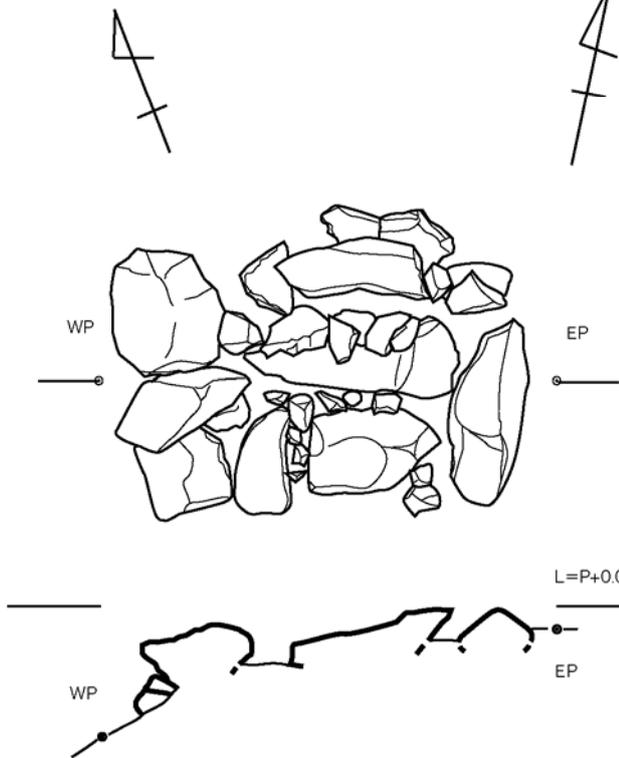
図版5 No. 19 石組み墓



図版6 No.18 石組み墓



図版8 No.20 石組み墓



図版7 No.31 石組み墓

0 0.5m

石組み墓実測図・2 縮尺 S=1:20

り、これに倣ったものであると伝えられている。

このような形態差が築造年代を示す可能性は高く、一方で被葬者の属性を示すことも考えうる。できれば全石組みの詳細実測を実施し、配置と合わせて考察を行いたい。

一方地下構造は潜伏キリシタンにあっては寝棺を採用すると考えられており、木口氏にもそう伝えられている、しかしこれは実際に発掘してみなければ実証できず、墓としての機能が継続している以上不可能である。一つの手法として、改葬墓痕跡を掘り下げ調査することが考えられるが、棺体の圧痕等が残存しているならばともかく、改葬時の掘方の検出に終わりそうである。また、地中探査による調査も可能であろうが、その制度は探査条件に左右されるものであり、費用も増大する。伝承を裏付けるためには、物質的な根拠が必要となる、もし今後改葬の機会があれば、ぜひとも立ち会い調査をお願いしたいと考えている。

使用される石材は、五島層群に見られる砂岩、泥岩又はそれらが珪質化したものが最も多く、次いで表中では多孔質石英斑岩とした石英粒が脱落した五島花崗岩類が見られる。その他、少量ながら凝灰岩類、安山岩も含まれる。

また形状は、角礫又は円礫が大部分であり、石組みに合わせて粗割を行った可能性もある（図3）が、基本的には石材をそのまま使用したようである。またその大半は、前者では周辺の再堆積層に含まれる包含礫、後者では小河川の円礫や、近世期には浦頭付近まで湾が入っていたことから、海岸礫など、比較的近隣で入手できるものであったと考えて良い。しかし凝灰岩類は戸岐向の南西部または大泊付近の五島層群戸楽層、安山岩類は南河原付近の岩脈に産するものであり、ある程度の距離をふまえても選択的に運んできた可能性が高い。また、一字一石経で使用されるような扁平小円礫の産出地も把握できていない。以上のように、手近な石材をその形状により部分的にはある程度選択的に使用しており、場合によっては遠隔地の石材を搬入している。

#### 5. 4. 遺物観察の成果

遺物は、降雨等による洗い出しのため予備調査時に比してかなり目立つようになった、これらのほぼすべてを取り上げた。表採数は取り上げ番号で142を数える、鳥骨1とガラス1をのぞきすべて陶磁器である。

調査後、10月にかけて加藤の指導のもと洗浄を

行ったが、現段階までに注記・接合は行っていない。このため、同一個体を破片の数だけカウントしている物があり、個体の実数はこれより減ずる。詳細については整理作業終了後あらためて報告したい。

表3～8は美濃口雅朗氏の観察によるものである。

そもそも、墓所の成立を考えると、18C第3四半期以降当該地域に移民が定着、開墾が開始され、現地で死者が発生することによって墓所もまた設定されたとするならば、墓所周辺から出土する遺物の大半は、墓前の供献または改葬時に破棄された副葬品が占めるはずであり、民俗的伝承例によれば陶磁器の副葬品は考えにくい。またそれ以外の遺物に関しては、生活拠点から墓所まである程度距離が有ることを考慮すると、開墾時や使用時に持ち込んだものの破損に伴う廃棄がわずかにある程度で、故意に墓所に廃棄物を持ち込んだことは考えにくい。出土遺物の時期は故地から持ち込まれたものと、定住後、当地で入手されたものに大別され、前者ではいくつかの伝世品があるとしても、定着時よりやや古い製作年代が与えられるものが概ねの上限となり、極端に外れる時期のものは例外的な伝世品または、木の口集落成立以前の廃棄・埋納に伴うものと考えて良い。これらを前提として遺物を概観する。

まず、散布状況であるが、いくつかの集中部がある。まず上段南端から南東端の改葬墓付近である。大正期墓の改葬に伴うものと、上段改葬に伴うものであろうか、傍証として上段に改葬痕は認められるものの、遺物はほとんど採取されていない。

次に、中段南端付近である、同様に改葬に伴う廃棄が考えられるが、No.40から45の石組みに近接するもの、あるいはそれらに混入するものも有り別の要因も考慮する必要がある。

最後に下段縁辺部から里道にかけて散布する遺物については大部分が墓域及びその周辺から流出したものであり、原位置を保っているとは考えにくい。

これら以外に点在する遺物は、直近の墓に供献されたものと想定可能である。いずれにせよ表採遺物の大部分は墓所造営に関わるものであり、その時期は上限が造営開始よりやや古い時期、下限は墓所に対する供献の終了時期となるであろう。

個別の遺物に目を向ければ、もっとも古い時期が想定されるもので、18C後半の波佐見染付碗

(No.062~064、091同一個体)及び、18C末~19C中頃（禁教期の製作年代）波佐見染付碗（No.134）、肥前系染付碗（No.041、055、065、069、078~079、088）、及び鉢類（No.059）、肥前系染付供膳具（No.90）、肥前系染付輪花皿（No.110）等の肥前系染付群と関西系陶器碗（No.131、132）が挙げられる。これらはあくまでも製作年代を示すものであって、供献時期すなわち墓の造営時期を直接示すものではない。また逆に言えば、最新の遺物が墓造営の下限を示すものとはならない、例えば遺族、縁者による死後供献の可能性も考えられるからである、しかしこれは最後に行われた供献行為の時期を示唆するものにはなり得る。

最新では20C第3四半期が与えられる肥前系磁器上絵碗（No.035、037、039、117同一個体）が確実な例であり、戦後から昭和50年代までは墓として祭祀がおこなわれていたことを裏付ける。

その他のピークとして、幕末までの時期と、禁教停止後19C末までが挙げられる。これらはほとんど肥前系であり鍋島藩有田を始めとする肥前一帯の生産品とそれらの技術が転移した各地の染付を含む、五島でも肥前系染め付けを製作しており注目される場所であるが、大部分の遺物は小片であり産地特定には困難がある。今後接合・復元を行い法量や細部の施文・形態を確認し、さらなる産地・製作年代特定を進めたい。また中でも大村藩波佐見で製作された染付の一群があり、大村藩から五島に渡ってきた潜伏キリシタンの故地であることを考えれば、いわゆるくわんか手のような大量生産に特化する傾向があるとはいえ移住時に持参した可能性を考えることもでき、19C代以降の入手経路が単なる流通の結果であるのか、大村藩領住民と直接交流があるのかが注目される。

また、早い時期から関西系陶器が入っており、19C中頃以降は瀬戸美濃系も流入する。厳密な墓所の開始時期は今のところ特定できないが、遅くとも19C前半から昭和に至るまでの陶磁器の最終使用年代が継続的に追える貴重な例であり、今後接合・実測を経て、全遺物の記録を公にし生産と流通の変化を追える代表的な調査として公表したい。

## 6. 今後の調査と保護

これまで1次調査の概要を述べてきたが、遺物整理は未だ途中であり、墓所について配置関係の把握ができた段階である。それぞれの石組み墓については、その構造を明らかにし、形態分類や編

年を行うためには、個別実測が欠かせない。

また、本墓所を後期潜伏キリシタン移住に伴うものと位置づけた時、それ以前の動向は大村藩外海地区を中心とした潜伏キリシタンの移住元との比較検討を行う必要がある。本調査をきっかけにこれらを進めていくことにより禁教下の潜伏キリシタンの実態を考古学的に解明せねばならない。

さしあたって遺物整理と実測を進め、なるべく早い段階で悉皆実測を実施する必要がある。なぜならば、自然と物質の宿命として墓所はわずかながら日々消失に向かって時計の針を進めているのであり、時間が経つに連れて情報は失われていくものである。

これを防ぐためには、墓所の具体的な保護措置が取られなければならない。ひとつは地方自治体による文化財指定などの行政的保護・法的保護である。そのためには文化財的価値を調査の進捗と成果の取りまとめによって本墓所を客観的に位置づける必要がある。

また直接的には、物理的保護を考えなくてはならない、これは一義的には行政の行うべきものであろうが、歴史的価値を確定させるまでは行政のあり方にとって指定文化財ではない歴史資産を対象とすることは制度的に難しい。ならば応急的に一番影響の大きい雨水対策として、全面に保護シートを張り、排水経路を確保することによって崩壊、流失を防ぐことが急務である。これは比較的簡単かつ安価にできることであり、さらに例えば杭とロープによる仮設囲いをするによって人為的な破壊をある程度予防する効果も期待できる。すでに一次調査で遺物の取り上げをほぼ完了し、管理者の清掃時の廃棄や盗難防止に資することができた。あとは調査成果を持って行政に働きかけ、一刻も早い法的保護を講じていこうと我々は考えている。

## 7. まとめにかえて

今回世界遺産への国内推薦から借しくも漏れたが、キリスト教遺産群の構成要素を見渡す時、禁教期に該当するものがその性格もあって不足しているように思われる。本墓所が後世遺産に直接該当することは難しいが、日本におけるキリスト教史を通時的、有機的に結びつける要素たり得ることは明らかである。

布教期から禁教期にかけての調査例は豊後地区や高槻、江戸などいくつかの地域で明らかになりつつあるが、時期が新しくなるにつれて、検証が

行われていない伝承の範疇にとどまることが少なくなく墓所の実態は未だ明確とは言いがたい状況にある。全国的な発掘成果は記録や直接的根拠となるいわゆる「キリシタン墓碑」、メダイやロザリオといった遺物から時代を下ってその系譜が徐々に明らかになりつつある。

本調査をきっかけに長崎地域におけるキリシタン墓の系譜、ひいては潜伏キリシタンの動向が時代を遡上して解明されることを期待する。これによって禁教期の開始と終焉の両側から実証的調査が出来る時、初めて通時的な系譜がつながることとなる。キリシタン禁令に関する記録が数多く残っている長崎から物質文化としての資料研究を発信していくことが、我々の責務であると切に思う。

## 5. 5. 引用文献

- ※1：津田清隆。蒲田泰彦・松井和典（1994）「1：50,000地質図 福江 15-8」通商産業省工業技術院地質調査所（独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター 地質図NAVIより閲覧）
- ※2：福江市史編集委員会編（1995）『福江市史上巻』福江市
- ※3：宮崎賢太郎（2008）『カクレキリシタン』長崎新聞社
- ※4：加藤久雄（2013）『歴史的環境 文化的景観調査報告書第1集・半泊の文化的景観』半泊地域協議会
- ※5：前掲※2
- ※6：前掲※3
- ※7：加藤久雄（2013）『五島における甘藷の生産 文化的景観調査報告書第1集・半泊の文化的景観』半泊地域協議会
- ※8 大村市立史料館蔵『長墓改覚』

## 参考文献

- 日本の地質『九州地方』編集委員会編（1994）『日本の地質9九州地方』共立出版
- 福江市史編集委員会編（1995）『福江市史上巻』福江市
- 宮崎賢太郎（2008）『カクレキリシタン』長崎新聞社
- 別府大学文化財研究所・大分県考古学会・九州考古学会編（2009）『別府大学文化財学研究所企画シリーズ2・一ヒトとモノと環境が語る一キリシタン大名の考古学』思文閣出版

日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会編（2012）『研究発表資料』中園成生『主旨説明』・下川達彌『九州におけるキリシタン考古学の展開』・田中裕介『キリシタン墓地の構造』・大石一久『日本におけるキリシタン墓碑の様相』・井藤暁子『近畿地方を中心としたキリシタン考古学の現状』・今野春樹『東日本のキリシタン遺跡と遺物』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会

石造遺産調査会編（2013）『文化的景観調査報告書第1集・半泊の文化的景観』半泊地域協議会  
今野春樹（2013）『考古学調査ハンドブック8・キリシタン考古学』ニューサイエンス社

## 謝 辞

本調査は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2013B3の補助を得ておこなわれたものである。

木口榮様（墓所管理者）・美濃口雅朗様（熊本市観光文化交流局文化振興課埋蔵文化財調査室）・田中裕介様（別府大学文学部教授）・松本作雄様（五島市文化財保護審議委員会委員長）・松下孝幸様（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム名誉館長）・永治克行様・株式会社有明測量開発社様  
デジタルトレース他をお願いした堀章子様・天本雅様（石造遺産調査会）

五島市の皆様、別府大学関係者の皆様・本学関係者、学生諸氏。（順不同）

本調査と概要報告にあたり、皆様のご助力とご指導を賜りました。心よりの感謝申し上げます。

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査)

遺構番号	段	種別	平面形	長さ	幅	レベル	方位	使用磔	石材	パターン	観察	備考
1	上	伏碑	長方形	69	48	100	110		硬質砂岩			実測済み
2	上		不整三角形 (本来は方形?)	80+ $\alpha$	80	89	120	角磔	砂岩~泥岩、多孔質 石英斑岩	角磔囲み	一部埋没又は改葬	
3	上	小児墓?	方形?	70	60	83	90	円磔・一部角磔	砂岩~泥岩、多孔質 石英斑岩	外周列状	中央部はナシ (埋没?)	
4	上	小児墓?	不整形	57	40+ $\alpha$	88	75	円磔・角磔	砂岩+多孔質石英斑 岩	角磔囲み		
5	中		長方形	117	70	154	115	円磔・一部角磔	砂岩	角磔囲み		
6	中		方形	85	75	146	185	角磔	砂岩~泥岩	大型磔外形・2段以 上	樹木により破損	
7	中		不明	120	60+ $\alpha$	155	195	角磔・小円磔	砂岩・珪質砂岩	角磔囲み+小円磔	右半分埋没	
8	中		方形	67	74	162	200	角磔+円磔(多孔質 石英斑岩に限る)	泥岩・多孔質石英斑 岩	囲み+充填・中央に 大型角磔		
9	中		長方形	65	95	152	180	角磔+円磔	泥岩・多孔質石英斑 岩	囲み+小磔充填中央 長円磔		
10	中	小児?	円形	77	70	163	180	円磔+角磔・大型角 磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	円磔囲み		
11	中		長方形	111	83	172	120	角磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	角磔囲み+磔充填		
12	中		長方形	117	85	191	205	角磔・円磔	砂岩・凝灰岩・珪質 砂岩	囲み		
13	中		方形	86	86	183	160	角磔・円磔	砂岩・凝灰岩・珪質 砂岩	角磔囲み+小磔充填		
14	中		長方形	125	76	188	140	角磔	砂岩~泥岩	角磔積み上げ	15を切る樹根	
15	中		方形	76	68	197	120	角磔	砂岩~泥岩	角磔囲み+小磔充填		
16	中		方形	82	90	194	105	角磔・一部円磔	砂岩~泥岩・珪質砂 岩+多孔質石英斑岩	角磔囲み+小磔充填	17を切る	
17	中	小児?	方形	70	65	191	100	角磔・一部円磔	砂岩・多孔質石英斑 岩	角磔囲み+中心大型 角磔		
18	中		方形	90	75	191	105	大型角磔+角磔+円 磔	砂岩~泥岩・凝灰角 磔	大型角磔囲み+小磔 充填+中心長円磔		
19	中		長方形	102	70	204	95	大型角磔+角磔+円 磔+小円磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	大型角磔囲み+小円 磔充填		実測済み
20	中		方形	105	105	209	90	大型角磔+角磔+円 磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	大型角磔囲み+円磔 充填・中央に角磔		
21	中	小児墓?	方形	75+ $\alpha$	80	193	95	角磔+扁平小円磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	大型角磔囲み+小角 磔・小円磔充填	一部埋没	
22	中	小児墓?	方形	70	76	191	95	大型角磔+小角磔	砂岩~泥岩・安山岩・ 凝灰岩	大型角磔囲み+小角 磔充填		実測済み
23	中	小児墓?	方形	70	65	199	85	角磔+円磔	砂岩~泥岩+多孔質 石英斑岩	磔囲み+小磔充填		実測済み
24	中		不整形	105	112	207	95	角磔・一部円磔	砂岩~泥岩・珪質砂 岩・凝灰岩	磔囲み+磔充填		実測済み
25	中		方形	105	95	214	80	角磔	砂岩~泥岩+1/2 多孔質石英斑岩	2段囲み+充填中央 に立石角磔	斜面直下・一部樹根	
26	中		方形	90	86	203	110	角磔・一部円磔	砂岩~泥岩・珪質砂 岩・凝灰岩	囲み+角磔充填	やや乱れる	
27	中		不整形	100	100	206	140	角磔	砂岩~泥岩	角磔囲み	樹木根のため乱れる	
28	中		方形	80	70	221	135	角磔	砂岩~泥岩・凝灰岩・ 多孔質石英斑岩	囲み+充填		実測済み
29	中		方形?	165	50+ $\alpha$	204	125	角磔・一部小円磔	砂岩・珪質砂岩・凝 灰角磔	大型角磔囲み+充填	右上角ナシ	
30	中		方形	100	90	202	100	角磔	多孔質石英斑岩・砂 岩~泥岩	角磔囲み	中心部は樹木のため 不明	
31	中		長方形	100	60	201	105	角磔・大型角磔・一 部円磔	多孔質石英斑岩・角磔 凝灰岩・珪質砂岩・泥岩	囲み・中心に角磔		
32	中		長方形	112	78	203	120	角磔・円磔	多孔質石英斑岩・砂 岩~泥岩・珪質砂岩	大型磔囲み・角磔充 填		
33	中		長方形	115	85	205	110	角磔	砂岩~泥岩・珪質砂 岩・凝灰岩	大型磔囲み・角磔充 填		
34	中		長方形	70+ $\alpha$	70	207	100	角磔・円磔	多孔質石英斑岩・泥 岩・凝灰岩	大型磔囲み	倒木のため詳細不明	
35	中		方形	90	75	204	100	角磔	砂岩~泥岩・多孔質 石英斑岩	大型磔囲み	中心部は樹木のため 不明	
36	中	小児	長方形	75	50	217	90	角磔・円磔	砂岩~泥岩・多孔質 石英斑岩	大型磔囲み・小磔充 填	乱れ著しい	
37	中		方形	90	96	221	95	角磔・一部円磔	砂岩~泥岩・多孔質 石英斑岩	大型磔囲み・小磔充 填・2段以上		実測済み
38	中		方形	85	87	221	65	角磔	砂岩~泥岩・珪質砂 岩・多孔質石英斑岩	大型磔囲み・小磔充 填	樹根で変形・斜面	
39	下		方形?	100	100?	255	70	角磔・円磔	多孔質石英斑岩・砂 岩~泥岩	全形は不明瞭・中心 に長角磔1立石	斜面のため流れ出す	
40	中		方形	110	105	213	40	角磔・円磔	砂岩~泥岩・多孔質 石英斑岩・珪質砂岩	囲み・充填・中心に 角磔2立石		
41	中	小児	方形	75	70	213	50	角磔・円磔	泥岩・多孔質石英斑 岩・砂岩	大型磔囲み・小磔充 填・左下角に大きい		

遺構観察表 1

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査)

遺構番号	段	種別	平面形	長さ	幅	レベル	方位	使用磔	石材	パターン	観察	備考
42	中	小児	不整形?	53	60	216	50	円磔・角磔	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	不整形・積み方も雑		
43	中	小児	方形	60	55	214	45	角磔+小扁平円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	大型角磔囲み+扁平円磔充填		
44	中		方形	96	75	205	30	角磔+小扁平円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	角磔囲み+扁平円磔充填中心に長円磔		
45	中	小児	長方形	80	110	211	45	角磔・一部円磔	砂岩～泥岩		かなり乱れる・2基?	
46	中	改葬墓				200		楕形+基壇長方形石材	花崗閃緑岩		木口家「八月九日」	廃棄石材
47	南		方形	75	65	135	45	角磔	花崗斑岩	囲み・中心部は不明		
48	南	改葬墓				138		楕形+基壇長方形石材	花崗閃緑岩		木口家「木口ナル立之・大正十四年」	廃棄石材
49	下		方形?	60+α	100	220	140	角磔+小扁平円磔	砂岩～泥岩	角磔囲み+扁平円磔充填	左下1/2カット	
50	下		方形?	78	78	222	120	角磔・円磔	砂岩～泥岩・火山岩(集塊岩?)	磔囲み+充填中心に長円磔1		
51	下	小児	方形?	52	45	279	100	角磔・円磔	砂岩・集塊岩	磔囲み+充填	右上埋没	
52	下	不明	不明	75	140	246	160	角磔	多孔質石英斑岩・珪質砂岩・泥岩		倒木のため詳細不明・下半流失	
53	下	小児	方形(乱れる)	85	85	262	140	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩・輝石安山岩	角磔囲み+充填	上1/3やや埋没・他の墓の改葬の影響か?	
54	下	小児?	方形(乱れる)	60+α	66	244	120	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	囲み+磔充填中心に円磔	改葬のためか右下埋没	
55	下		方形(乱れる)	65	85	284	100	角磔・大型角磔・一部円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	囲み+充填?	上半埋没	
56	下	小児	方形	45	55	271	60	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・輝石安山岩	囲み+小磔充填	右上半埋没	
57	下		長方形?	60	80	279	60	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・輝石安山岩		倒木のため詳細不明	
58	下		方形(乱れる)	75	90	277	160	角磔・円磔	砂岩～泥岩	磔囲み・中心不明瞭	右下無し・抜き後の影響?	
59	下		方形	95	95	287	120	角磔・円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・安山岩?	角磔囲み+充填	円磔(多孔質石英斑岩)中心?	
60	下		方形	70	75	287	90	角磔・円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・安山岩	平坦		
61	下		方形	70	75	281	80	角磔	砂岩～泥岩・磔岩	角磔囲み+角磔充填	一部倒木下	
62	下		方形	80+α	100	275	55	角磔・一部円磔	砂岩～泥岩・集塊岩	角磔囲み+長円形1(元は立石?)2段以上		
63	下		方形(乱れる)	80	115	291	105	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩	ほぼ平坦	一部倒木下に隠れる	
64	下	小児?	やや不定形な方形	70	70	290	60	各歴・円磔・小円磔	砂岩～泥岩	磔囲み+小磔充填	一部倒木下に隠れる	
65	下	抜き後?	不定形	60+α	120	286	80	角磔	斑岩・多孔質石英斑岩・砂岩～泥岩・珪質砂岩		下半は流失・檀越上場	
66	下	小児?	方形	65	65	259	110	角磔	泥岩・石英斑岩	囲み?	上半埋没・下半流失	
48右	南	改葬墓				144		猫脚基礎・基壇	花崗閃緑岩		木口家・48と同一?	
a	上	磔集積	不定形	180	110	99	110	角磔・円磔	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩		改装時の集積?	
b	上	磔集積	不整形	20	120	108	計測不能	角磔・円磔	砂岩+多孔質石英斑岩		1段目上端に沿う抜き跡又は補強	
c	上	磔集積又は抜き跡	不整形	120	180	91	95	角磔・円磔	砂岩・多孔質石英斑岩		墓石組みの残欠又は埋没	
d	上	磔集積又は抜き跡	不整形	50	60	95	95	角磔	砂岩・多孔質石英斑岩・凝灰岩	角磔囲み		
e	上	伏碑又は墓石基壇?	長方形板石	48	32	88	85	加工板石(ノミ痕あり)	砂岩		小児墓の可能性あり	
f	中	抜き跡?	方形?	72	75	193	105	角磔	多孔質石英斑岩・凝灰岩	方形囲み	16に切られる	
g	中	抜き跡?		60+α	?	205	135	角磔・円磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩		左下の角のみ残る	
h	中	抜き跡		?	60	212	145	角磔・円磔	砂岩・珪質砂岩・安山岩	角磔囲み	下方1辺のみ残る	
J	下	抜き後	長方形	160	100	242	135		一部磔残る(安山岩・泥岩)		深さ10～30cm程度下がる	
K	中	磔集積	不明瞭	55	40	214		角磔・円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩		掘り上げ時に移動?	
K	下	抜き後		120	110	284	115				深さ10～25cmわずかに磔残る	
L	中	抜き跡?	長方形?	100	65+α	212	100	角磔・扁平小円磔	多孔質石英斑岩・青灰色泥岩(扁平小円磔)	角磔囲み+扁平小円磔充填	下半流失	
L	下	抜き後		110	90	289	85		砂岩～泥岩・珪質砂岩・石英斑岩		僅かに磔残る	
X	中-下		不定形	80	50+α	214	50	角磔・円磔	砂岩～泥岩・輝石安山岩	囲み?	右下埋没	

遺構観察表2

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）

取上げ番号	焼成形態	器種	産地	時期	特徴	メモ
001	磁器釉下彩	皿	肥前系	19C後半	蛇の目凹形高台。内底月・松・鳥文。輪郭線は黒、濃みは酸化コバルト？	
002	磁器	碗	瀬戸美濃	20C前半？	外面は柿釉地に鉄釉・藁灰釉で花文。内面透明釉。口唇部黒釉。	中里九学参照
003	磁器染付	小坏	肥前系	19C	腰部に稜。外面山水・遠山文、呉須酸化コバルト？内面無文。高台畳付細砂付着。	
004	磁器染付	小坏	肥前系	20C前半	内外面とも口縁部に吹き絵（エアスプレー）による半円状の濃み（グラデーション）、呉須酸化コバルト。	
005	磁器色絵	筒形碗	不明	20C前半～中頃	外面淡緑色、内面透明釉掛け分け。外面ゴム版絵付け、竹文・角印「蘇束」（朱色上絵）。口唇部金彩。	完形
006	ガラス	瓶		近代	体部筒形。藍色。微気泡目立つ。	
007	磁器釉下彩	筒碗	肥前系	20C	外面腰～高台黒釉。外面体部鉄釉地、浅い彫りによる施文（デザイン化した葉？）。口唇部柿釉。内面透明釉。	011と同一、中里九学参照
008	磁器	碗	肥前系	19C？	小片。現況は白磁。	
009大	磁器染付	碗	肥前系	19C後半～20C初頭	外面型紙摺り、矢羽根状文。内面無文。	
010	磁器染付	碗	肥前系		小片。外面口縁部横線（1条）。内面現況無文、粗い貫入。	
011	磁器釉下彩	筒碗	肥前系	20C		007と同一
012	磁器	碗	肥前系		小片。現況は白磁。胎土中黒色微粒含む。	
013	磁器	供膳具	肥前系		小片。現況は白磁。胎土中黒色微粒含む。	
014	磁器染付	碗？	肥前系	19C後半以降	外面文様不明、呉須酸化コバルト。内面現況無文。	
015	磁器染付	平碗平	肥前系	19C	外面文様不明（風景）。内面口縁部略化した四方禪文。外面文様不明（風景）。	
016	磁器染付	碗？	肥前系	19C	外面文様不明、呉須酸化コバルト？内面現況無文、粗い貫入。	
017	青磁	平碗	肥前系	19C末～20C中頃	外面青磁釉、内面透明釉掛け分け。口唇部口鏝。外面蓮弁文（陽印）。	027bと同一
018	磁器釉下彩	供膳具	肥前系	近代	細片。現況は白磁。外面に緑色（酸化クロム）の小斑、釉下彩文の飛沫。	
019	磁器	筒碗	肥前系	20C		007と同一
020	磁器染付	德利	肥前系	19C前半～中頃	円柱状の体部。外面体部花樹文（梅？）。	
021	磁器	供膳具	肥前系		現況は白磁。	
022	磁器上絵	コップ	瀬戸美濃系	20C	外面体部下位金彩上絵に花弁外郭線。外面底部ゴム印「マルト陶器」。多治見市に「マルト陶器」現存。	023・025と同一
023	磁器上絵	コップ	瀬戸美濃系	20C	外面体部上位エアスプレーによる桃色釉下彩（花弁上辺塗り分け）。下位金彩上絵による花弁外郭線。口唇部口鏝（金彩上絵）。	022・025と同一
024	磁器	德利	肥前系	19C	細頸、肩なだらか。外面頸部横線（1条）。	
025	磁器上絵	コップ	瀬戸美濃系	20C		2片あり（接合）、022・023と同一
026	磁器釉下彩	筒碗	肥前系	20C	外面腰部鉄釉。内面透明釉。	126と同一、027aと同一？
027 a	磁器釉下彩	筒碗	肥前系	20C	外面体部青緑色の太い横線＋白釉刷毛掛け。腰部鉄釉。内面透明釉。	
027 b	青磁	平碗	肥前系	19C末～20C中頃	外面青磁釉、内面透明釉掛け分け。外面蓮弁文（陽印）。高台見込みゴム印「慈山」。有田に「慈山」窯現存。	017と同一
028	磁器上絵	コップ	瀬戸美濃系	20C	外面体部上位エアスプレーによる桃色釉下彩（5弁花上辺塗り分け）。下位金彩上絵による花弁外郭線。口唇部口鏝（金彩上絵）。外面底部ゴム印「マルト陶器」。多治見市に「マルト陶器」現存。	完形
029 a	磁器上絵	コップ	瀬戸美濃系	20C	外面体部上位エアスプレーによる桃色釉下彩（花弁上辺塗り分け）。下位金彩上絵による花弁外郭線。口唇部口鏝（金彩上絵）。	022・023・025と同一？
029 b	磁器染付	小碗	肥前系	19C中頃～後半	外面腰部花弁文？（雑な縦線）、呉須酸化コバルト？内面無文。	
030	磁器釉下彩	小坏	瀬戸美濃系	19C末～20C前半	外面銅版転写、雪輪文・花文（菊？）・デザイン化した字「君」。藍色（酸化コバルト）・オリブ色。内面無文。高台内側面細砂付着。	完形
031	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	型紙刷り。外面口縁部半花文、体部矢羽根状。内面口縁部環珞文。型紙刷り。外面口縁部半花文、体部矢羽根状。内面口縁部環珞文。	
032	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面よろけ縞文。内底格子文。	
033	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面縦縞と雪持笹文。内面口縁部略化した青海波文。外面縦縞と雪持笹文。内面口縁部略化した青海波文。	
034	磁器染付	筒碗	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙刷り。外面口縁部～体部伊勢小紋、腰部連弁文。型紙の継ぎ目3箇所。内面口縁部環珞文。	
035	磁器上絵	碗	肥前系	20C第3四半	体部逆台形。外面酸化コバルトによる横太線（釉下彩）、金・にぶい朱色の上絵。内面無文。	037・039・117と同一
036	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	外面主文様不明、内面口縁部横線（1条）、呉須酸化コバルト。胎土灰色味。	
037	磁器上絵	碗	肥前系	20C第3四半	体部逆台形。外面酸化コバルトによる横太線（釉下彩）、金・にぶい朱色の上絵。内面無文。高台見込みゴム印「有田」（にぶい朱色）。	035・039・117と同一
038	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	型紙刷り。外面弧線文（内部青海波）、花樹文。内面口縁部環珞文。胎土灰色味、黒色微粒含む。	141と同一？
039	磁器上絵	碗	肥前系	20C第3四半		035・037・117と同一
040	磁器染付	小碗	瀬戸美濃系	19C末～20C前半	外面銅版転写、主文は不明、客文は桐。呉須・緑色（酸化クロム）・緑褐色。内面無文。高台内側線（1条）。	
041	磁器染付	碗	肥前系	18C末～19C中頃	外面熨斗文・松竹梅文、呉須にじむ。内面無文。内底蛇の目軸剥ぎ。	4片あり（3片は接合）、135と同類の可能性
042	磁器染付	端反小碗	肥前系	1820～1860年代	外面草花文。内面無文。内底三足ハマ跡（現況2箇所）。胎土中黒色微粒含む。	
043	磁器染付	碗	波佐見	1820～1860年代	外面雪輪草花文（雪輪縦長）。高台見込み無文。胎土灰色味。	
044	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	型紙刷り。外面捻花状分割内、蛸唐草文・梅枝文・青海波文。内面口縁部環珞文。胎土灰色味。	047と同一、048と同一？
045	磁器染付	碗	肥前系	1820～1860年代	外面草文。内面口縁部格子文。外面草文。内面口縁部格子文。	
046	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面松文。内面口縁部略化した青海波文。胎土灰色味、黒色微粒含む。	2片あり（同一？）
047	磁器染付	端反碗端	肥前系	19C後半	型紙刷り。外面捻花状分割内、蛸唐草文・梅枝文・青海波文。内面口縁部環珞文。胎土灰色味。	044と同一、048と同一？

遺物観察表 1

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）

取上げ番号	焼成形態	器種	産地	時期	特徴	メモ
048	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	型紙刷り。外面捻花状分割内、蛸唐草文。内面口縁部瓔珞文。胎土灰色味。	044・047と同一？
049	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面文様不明（草花？）。内面口縁部略化した宝文？胎土灰色味。	
050	磁器染付	碗	瀬戸美濃系	20C前半	小片。内外とも口縁部に吹き絵（エアスプレー）による横位の濃み（グラデーション）。	
051	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面主文唐子・松。口縁部内外とも瓔珞文。内面酸化コバルトの小斑。	066・073・102と同一
052	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	小片。型紙摺り。外面主文松。口縁部内外とも瓔珞文。内面酸化コバルトの小斑。	051・066・073・081・102と同一？
053	磁器染付	碗or鉢	肥前系	近世	小片。口縁部直立。外面文様不明。内面現況無文。	
054	白磁	罎子	瀬戸美濃系	19C末～20C中頃	ノップ罎子。ビニールカバーをした電線を括り付けている。	完形
055	磁器染付	碗	肥前系	18C末～19C中頃	腰張り、薄手、丸碗か。外面文様不明。内面現況無文。	
056	磁器染付	碗	波佐見	1820～1860年代	外面二重網目文。内面無文。胎土灰色味。	
057	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	腰～底部片。主文不明。内面体部下位圏線、酸化コバルト。二次焼成（釉白濁、ただれ）。	
058	磁器染付	端反碗蓋	肥前系	1820～1860年代	外面文様不明。内面口縁部雷文。	
059	磁器染付	鉢？	肥前系	18C末～19C中頃	口縁部小片。外面文様不明（現況無文）。内面七宝文（墨弾き技法）。	009(小)と同一？
060	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面主文欠、客文蝶。内面口縁部横線（2条）。	
061	磁器染付	碗	肥前系		小片。口縁部直立。外面文様不明。内面現況無文。	
062	磁器染付	碗	波佐見	18C後半	外面雪輪草花文。高台見込み無文。胎土灰色味。口縁部歪む。	063・064・091と同一
063	磁器染付	碗	波佐見	18C後半		062・064・091と同一
064	磁器染付	碗	波佐見	18C後半		062・063・091と同一
065	磁器染付	碗	肥前系	18C末～19C中頃	丸碗。釉白濁。外面文様不明（草花？）。内面口縁部横線（2条）。胎土灰色味。	
066	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面主文唐子・松。口縁部内外とも瓔珞文。内面酸化コバルトの小斑。	051・073・102と同一
067	青磁	小坏	肥前系	近代？	高台量付釉剥ぎ、他全釉。内面に鉄小斑あり。胎土灰白色。	089と同一
068	磁器染付	碗	肥前系	19C後半～20C初頭	小片。型紙摺り。外面主文松（他不明）。口縁部内外とも瓔珞文。	
069	磁器染付	小坏	肥前系	18C末～19C中頃	外面上位笹文。内面無文。高台内面細砂付着。	
070	磁器	小坏	瀬戸美濃	近代？	体部下位～高台部片。高台内打ち込みによる割り。現況は白磁。外面体部下位～高台鉄紫塗布。高台内無釉。	
071	磁器	碗？	肥前系		小片。現況は白磁。胎土灰色味。	
072	磁器釉下彩	碗？	肥前系	近代？	外面体部薬灰釉？による横太線。内外面とも透明釉白濁。胎土灰色味。	
073	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面主文唐子・松。口縁部内外とも瓔珞文。内面酸化コバルトの小斑。	051・066・102と同一
074	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面海浜風景文？（帆船あり）。内面口縁部格子文。胎土灰色味。	
075	磁器染付	碗？	肥前系	19C前半～19C中頃	細片。外面文様不明。内面現況無文。胎土灰色味。小石（5mm大）混入。細片	
076	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	口縁部小片。外面文様不明。内面現況無文。口縁部小片。外面文様不明。内面現況無文。	
077	陶器	土瓶？	関西系？	近代	算盤玉形の胴部小片。灰釉（黄白色）。外面は光沢あり、貫入目立つ。内面は薄い。	086と同一の可能性大
078	磁器染付	碗	波佐見	18C後半～19C中頃	外面主文欠（雪輪草花文？）。内面無文。胎土灰色味。	079・134と同一
079	磁器染付	碗	波佐見	18C後半～19C中頃	外面主文欠（雪輪草花文？）。内面無文。高台内「大明年製」崩れ銘。胎土灰色味。	078・134と同一
080	長管骨				鳥類？	松下氏確認
081	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面主文松。口縁部内外とも瓔珞文。	051・052・066・073・102と同一？
082	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面草文。内面口縁部横線（2条）。	
083	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	小片。外面文様不明（現況口縁部横線）、呉須酸化コバルト。内面現況無文。	
084	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面唐子文・松文。内面現況無文、酸化コバルトの小斑あり。	
085	磁器染付	端反碗？	肥前系	1820～1860年代？	外面文様不明。内面現況無文。胎土灰色味。	
086	陶器	土瓶	関西系？	近代	口縁部～肩部小片。蓋受け部釉拭き取り。弦用の耳は粘土紐貼り付け。灰釉（黄白色）。外面は光沢あり、貫入目立つ。内面は薄い。	077と同一の可能性大
087	磁器染付	端反碗？	肥前系	1820～1860年代？	口縁部小片。内外面とも口縁部横線（1条）。	
088	磁器染付	小広東碗	肥前系	18C末～19C初頭	外面主文不明。内底文様不明。	
089	青磁	小坏	肥前系	近代？		067と同一
090	磁器	碗	肥前系		小片。口縁部直立。現況は白磁。	
090小	磁器染付	供膳具	肥前系	18C末～19C中頃	口縁部細片。外面文様不明。内面七宝文（墨弾き技法）。	059と同一？
091	磁器染付	碗	波佐見	18C後半		062・063・064と同一
092	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面丸窓内蝶文、蔓草文。外面口縁部雷文。胎土灰色味。	107・108と同一？
093	磁器染付	端反碗？	肥前系	1820～1860年代？	腰部～高台部片。外面文様不明。内面現況無文。胎土黄橙色味。	
094	磁器	小丸碗	肥前系	1820～1860年代	外面鉄釉、内面透明釉掛け分け。高台内透明釉（掛けこぼし）。高台下位無釉、細砂付着。	095と同一
095	磁器	小丸碗	肥前系	1820～1860年代		094と同一

遺物観察表 2

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）

取上げ番号	焼成形態	器種	産地	時期	特徴	メモ
096	磁器	小丸碗	肥前系	1820～1860年代	体部下位～高台片。現況は白磁、透明釉白濁。胎土灰色味。	
097	磁器	供膳具	肥前系		口縁部細片。現況は白磁。	
098	白磁	小坏	肥前系	19C	釉は僅かに青緑色味。小鉄斑あり。高台内下位細砂付着。	
099	磁器染付	碗？	肥前系		体部細片。外面文様不明。内面現況無文、貫入明瞭。	100と同一？
100	磁器染付	碗	肥前系		腰部細片。外面文様不明。内面現況無文、貫入明瞭。	099と同一？
101	磁器染付	碗	肥前系		体部細片。外面文様不明。内面現況無文。胎土灰色味。	
102	磁器染付	小坏	肥前系	19C後半～20C初頭	型紙摺り。外面主文松。口縁部内外とも瓔珞文。内面酸化コバルトの小斑	051・066・073と同一
103	陶器	碗	萩焼	19C	藁灰釉。外面体部下位以下露胎。	136と同一？
104	陶器	碗？	関西系？		体部細片。内外灰釉、貫入目立つ。	119・129と同一？
105	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	口縁部小片。外面現況無文。内面口縁部横線（2条）。	
106	磁器染付	碗	肥前系	19C前半～中頃	薄手。外面文様不明。内面現況無文。	
107	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面丸窓内蝶文、蔓草文。外面口縁部雷文。胎土灰色味。	092・108と同一？
108	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面丸窓内蝶文、蔓草文。外面口縁部雷文。胎土灰色味。	092・107と同一？
109	磁器染付	供膳具	肥前系		体部細片。外面文様不明。内面現況無文。	
110	磁器染付	輪花皿	肥前系	18C末～19C中頃	蛇の目凹形高台。内底文様不明（現況草文）。	
111 a	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	外面楓文、呉須酸化コバルト。内面現況無文。	142と同類
111 b	磁器釉下彩	碗	肥前系	19C後半～20C初頭	外面文様樹木？線描き暗緑色、濃み淡青色。内面現況無文。	
112	磁器染付	碗	肥前系	19C後半	外面現況葉文（葉脈は墨弾き）、呉須酸化コバルト。内面現況無文。	113と同一、114と同一？
113	磁器染付	碗	肥前系	19C後半	小片。現況は白磁。	112と同一、114と同一？
114	磁器	碗	肥前系		2片あり。同一片？。ともに口縁部小片。現況は白磁。片？。ともに口縁部小片。現況は白磁。	2片とも112・113と同一？
115	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	外面略化した唐草文、呉須酸化コバルト。内面口縁部横線（1条）。胎土灰色味。	
116	磁器染付	小碗or小坏	肥前系	19C前半～中頃	体部小片。口縁端反り。外面文様不明。内面現況無文。	
117	磁器上絵	碗	肥前系	20C第3四半		035・037・039と同一
118	磁器染付	広東碗	肥前系	1800～1840年代	外面・内面見込み2本一組の斜格子文。	
119	陶器	碗	関西系？		口縁部細片。口縁端反り。内外灰釉、貫入目立つ。	104・129と同一？
120	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	体部小片。外面格子文。内面口縁部横線。胎土灰色味。	
121	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	外面現況草文。内面無文。	
122	磁器	端反碗？	肥前系	19C	口縁部細片。現況は白磁。	
123	磁器染付	碗？	肥前系		体部細片。外面文様不明。内面現況無文。透明釉白濁。	
124	磁器	供膳具	肥前系		高台部細片。現況白磁、透明釉白濁。畳付釉剥ぎ。胎土灰色味。	
125	磁器	供膳具	肥前系		体部細片、内面のみ残。	
126	磁器釉下彩	筒碗	肥前系	20C	外面体部青緑色の太い横線＋白釉刷毛掛け。腰部鉄軸。内面透明釉。	026と同一、027aと同一？。
127	磁器磁器	供膳具供膳具	肥前系		体部細片。外面文様不明。内面現況無文。	
128	磁器磁器	碗碗	肥前系		丸碗。口縁部～体部上位小片。現況は白磁。	2片あり、接合する
129	陶器陶器	碗？碗？	関西系？		体部小片。内外灰釉、貫入目立つ。	104・119と同一？
130	磁器染付磁器染付	供膳具供膳具	肥前系		体部細片。外面現況横線。内面無文。	
131	陶器陶器	碗碗	関西系	18C	底部小片。内底灰釉、貫入目立つ。高台部露胎。	
132	陶器陶器	碗碗	関西系	18C	腰部～高台部片。内底灰釉、貫入目立つ。高台部露胎。	
133	磁器染付磁器染付	皿皿	肥前系	18C末～19C中頃	蛇の目凹形高台。内底文様不明。	
134	磁器染付磁器染付	碗碗	波佐見	18C後半～19C中頃	外面主文欠（雪輪草花文？）。内面無文。胎土灰色味。	078・079と同一
135	磁器染付磁器染付	碗？碗？	肥前系		体部細片。外面熨斗文、呉須にじむ。内面現況無文。	135と同類の可能性
136	陶器陶器	碗碗	萩焼	19C	藁灰釉。外面体部下位以下露胎。	
137						欠番
138	磁器釉下彩磁器釉下彩	供膳具供膳具	肥前系	19C後半～20C前半	体部細片。外面文様不明、藍色（酸化コバルト）、白色。内面現況無文。	
139	磁器色絵磁器色絵	皿皿	肥前系		体部細片。内面文様不明、黒色の細条線。外面現況無文。	
140	磁器染付	端反碗	肥前系	1820～1860年代	口縁部小片。外面主文欠、口縁部横線（1条）。内面格子文。	
141	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	型紙摺り。外面弧文（内部青海波）、花樹文。内面口縁部瓔珞文。胎土灰色味、黒色微粒含む。	038と同一？
142	磁器染付	端反碗	肥前系	19C後半	体部下位片。外面楓文、呉須酸化コバルト。内面現況無文。	111 aと同類

※細片は長辺・長軸2.0cm以下、これより大きいものは小片。小片は必要に応じて記載。メモ欄「同一」は接合、「同一？」は接合しない。

遺物観察表 3